

「民族派学生運動」「新右翼」から「真右翼」への変遷

# 我が体験的維新運動史

第24回

靖国神社護持を熱祷する

**犬塚 博英**  
八千矛社・代表

## 亀井代議士からの電話

若い頃は「廊下トンビ」よろしく国会議員会館に足しげく出入りしていた時期がある。国会議員と意見交換をし、自分が一端の「政治活動」をしているかのような錯覚をしていたのだろう。親しくしていた若手（中堅）政治家の変節ぶりを目の当たりにして、会館への出入りを一切止めた。

十年ほど後に、西村眞悟代議士（当時）が、尖閣諸島に上陸する際（平成九年四月）にバックアップした日本青年社（衛藤豊久会長）と手違いから齟齬をきたし、トラブつている事態を收拾すべく、四宮正貴兄（本誌編集長）に案内してもらい会館事務所を訪ねたのが最後である。装いを新たにした議員会館に立ち入つたことはない。

一介の素浪人野人だが、天下を睥睨する大物気取りである。面会記入表に「陳情」と書くのが、苦痛で

ある。文句をつけることはあつても、国会議員に頼みごとをしたり、陳情しなければいけないようなことは、何一つない。バツジこそつけていないが、国会議員以上に國の行く末を案じ、國事に奔走しているという矜持だけは持ちたいと思つてきた。

十月初旬のある日、年少の友人F君から携帯に電話があり、「亀井（静香）先生の事務所に来ているんですけど、犬塚さんのことを伝えたら、お話ししたいと言われますので、今代り

(いぬつかばくえい)  
民族革新会議議長。  
昭和23年福岡県筑豊生まれ。長崎大学一年次に学内民族派運動に加わり、経済学部自治会役員、全国学協書記長などを経て、同47年卒業と同時に正式上京、一水会結成に参画。中村武彦先生に師事し、一水会退会後に八千矛社を再興継承する（同52年）。  
民族革新会議に加盟し、維新公論会議、博友会などで民族派の情報交換、連携、理論的深化を目指す。  
楠公祭、尊攘義軍十二烈士慰靈祭、神宮参拝禊会などの代表世話を務め、戦闘的維新実践者、正統右翼活動家の育成に励む。

ます」と言う。独特的の口調の亀井代議士に代わる。電話ではらちが明かないので翌日訪ねることを約し、翌日午後五時に四谷警察署隣にある個人事務所を訪ねた。記録係として民族革新会議事務局長・横山考平君（国の子評論社社主）を同道した。勢いのある政治家特有の「納得して帰つた」とか、「握手して別れた」といつた主観的判断を広められれば誤解を招くし、男が魔る。

会談中、三度携帯に電話があつたが、今大事な話をしてるので、終わり次第電話しますとの対応、討論が途切れるることはなかつた。事務所には女性秘書と年配の男性秘書がいただけ、前日の電話では「徒党を組んで来てもいいぞ」と啖呵を切つただけのことはある。右翼なんか恐くないと、太つ腹のところを見せつけられた。

横山君に言わせれば、互いに大きな声を上げたのが一度ずつ、話す時間は五分と五分、論争の勝敗を横山

君に聞くのは野暮というものか。決して不快な思いはしなかつた。

かといつて、亀井代議士の主張に与するわけにはいかない。不毛な論争にならないよう留意し、互いに正々堂々、靖国神社を護持奉賛するために、尊敬者として如何にあるべきか、互いの信ずるところと具体策をぶつけて行きたいと思う。

## 波紋を招いた徳川宮司のインタビュー記事

『週刊ポスト』2016年7月1日号に次のような記事が載つた。長くなるが引用してみよう。

「文明開化という言葉があるが、明治維新前は文明がない遅れた国だつたという認識は間違いだということを言つてはいる。江戸時代はハイテクで、エフでもあつた」

「私は賊軍、官軍ではなく、東軍、西軍と言つてはいる。幕府軍や会津軍も日本のことを考えていた。ただ、価値観が違つて戦争になつてしまつた。向こう（明治政府軍）が錦の御旗を掲げたことで、こちら（幕府軍）が賊軍になつた」

一連の発言が波紋を呼んだのは、靖

靖国神社が揺らいでいる。2年後に創立150周年に向けて徳川康久宮司が語ったインタビュー記事の発言が、波紋を呼んでいるのだ。記事は共同通信社から配信され、加盟する一部

国神社創建の「原点」に関わるからだ。

「賊軍VS官軍ではなく、東軍VS西軍」とする発言は、靖国神社の歴史觀を揺るがしかねないと受け止められたのだ。発言の背景には、徳川宮司の出自が関係している。徳川宮司は徳川家の末裔であり、「賊軍」の長であつた15代将軍・徳川慶喜を曾祖父に持つ。徳川家康を祀った芝東照宮に奉職した後、靖国神社の宮司になつた。「賊軍の末裔」が「官軍を祀る神社のトップ」に立つたわけである。

「明治維新史観」の見直しは最近のムーブメントだった。昨年1月に発売された原田伊織氏の『明治維新という過ち 日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト』(毎日ワンドブリッジ刊)がベストセラーになつたことを皮切りに、半藤一利氏と保阪正康氏の共著『賊軍の昭和史』(東洋経済新報社刊)など、明治維新の勝者の立場に立つた歴史観を見直す論考が相次い

で発表されている。

その流れで徳川宮司の発言が飛び出したことで、騒動が拡大しているのだ。著書で「薩長史観」を鋭く否定した原田氏は徳川宮司に同調するかと思いきや、意外にも「発言は中途半端」と手厳しい。

「明治維新当時、東軍・西軍という言葉はほぼ使われていません。徳川

家や会津藩に賊軍といふレッテルを張つたのは明らかに薩長ですが、その

責任や是非を問わず、當時ありもしなかつた言葉に置き換えて流布するのはおかしい。また、靖国神社の持つ歴史観を見直さないのは欺瞞です。『官も賊もない』と言うならば、まず靖国神社の境内にある大村益次郎(官軍側の司令官)の銅像を撤去すべきです」

そんな意見が飛び出すほど、今回の発言は衝撃だった。波紋が広がる徳川宮司の発言について靖国神社は、「創建の由緒から鑑みて『幕府側に對する表現や認識を修正すること』

を神社として行なう考えはなく、今後も同様の考えが変わることはないとの発言と理解しております」と回答した。宮司は150年間封印されていたパンダラの箱を開けてしまったのか。(引用終わり)

## 石原・亀井対談

(『月刊日本』8月号から)

亀井代議士と私が遭り合つた内容はほぼ正確に記録しているが、公開を前提にした「討論」ではなかつたので、公開は紳士協定違反、正々堂々が當方の信条である。

亀井代議士の主張は『月刊日本』や、つい先日報じられた『サンデー毎日』で明らかになつてている。それらを紹介してみよう。

石原慎太郎 VS 亀井静香  
靖国神社は西郷ら賊軍をお祀りせよ

### 『月刊日本』平成28年8月号

——再来年は明治維新150年を迎える。靖国神社は幕末維新の動乱に斃れた人々の御靈を祭祀している。だが、祀られているのは戊辰戦争・西南戦争で勝利した「官軍」であり、敗北した「賊軍」は今日まで鎮魂されていない。折しも靖国神社の徳川康久宮司が「幕府軍や会津軍も日本のことを考えていた。ただ、価値観が違つて戦争になつてしまつた」と発言し波紋を呼んでいる。

亀井 6月29日に靖国神社に行つて、徳川宮司と話してきた。私は毎年靖国神社にお参りしているが、ずっと靖国神社は賊軍もお祀りすべきだと言つてゐる。靖国神社はお国のために命を落とされた方々の御靈を慰めるためのもの。「君万民」「万民平等」、お國のために戦つた人間に差別などない。

石原 亀ちゃんの言う通り。歴史工学的に言うと、戦争は進歩も含めた大きな社会の変化変動の引き金になる。明治維新の内乱内戦、日清日露二度の世界大戦もそう。今日の日本が出来上がるまでに、いくつもの戦争があつた。必要とされた。

そこで犠牲になつた人々は、今日の日本を作つた大きな変化変動の素因。

そういう人たちのリアクションやエネルギーが蓄積して一つの起爆剤になり明治維新を確立した。戊辰・西南は日本が脱皮するために必要な戦争だつた。内戦内乱を経て初めて日本の近代化といつもの進んでいた。

長岡藩の河合繼之助とか西郷さんとか、戊辰戦争・西南戦争の犠牲者だつてみんな仕方なしに戦つた。そういう人たちを慰靈しないのはおかしい。

実際に、靖国神社は戊辰戦争で敗れた幕府軍や会津藩はじめ奥羽列

い。

亀井 西郷南洲や白虎隊がいなければ日本の近代化はできていない。勝ち負け関係なく合祀して鎮魂すればいい。今の世界はどんどん分裂状態に入つていて、「魂の分裂」と言つてもいい。その中で八百万の神々が住まう日本は、一つにまとまっていくという方向性を示すべき。日本では死んだらみんな神様仏様になる、あらゆる宗教が共存している。神仏習合だけではなくて、キリスト教も一緒になつていて。

日本文明も文明史的に非常に大切な時期に差し掛かっている。まず南洲や白虎隊をお祀りして日本自身が一つになる。日本の文化伝統に従つて、われわれの心をすつと真つすぐ、一つにしていくことが大事。「隕より始めよ」です。

亀井 色んな人に声をかけているが、賊軍の合祀に反対する人はいない。山口3区の河村健夫議院運営委員長は「長州と会津の長い間の怨念をど

うにかしなければいけないと思つた。ぜひ一緒にやりたい」鹿児島5区の森山裕農水相も「西郷南洲をぜひ合祀したい」と言つてくれた。遺族会や崇敬会にも声をかけているが、みんな賛成。崇敬会会长の扇千景さんも理解を示してくれた。

#### 〈一部抜粋〉

靖国神社に会津藩など「賊軍」も合祀を  
入れ

『産経新聞』11月13日

亀井静香元金融担当相や石原慎太郎元東京都知事らが12日、東京・九段北の靖国神社を訪れ、西南戦争で倒れた西郷隆盛や戊辰戦争で敗れた旧幕府軍など「賊軍」とされた戦没者を合祀するよう徳川康久宮司に申し入れた。

亀井、石原両氏らを呼び掛け人に、自民党の一階俊博幹事長や中曾根康

た際には、大野ご夫妻を招き小生の女房も同席させていただき恩師・中村と、師の戦前からの同志園田天光光先生（天草出身・園田直代議士令夫人）六人で和やかなお祝いをしたことが懐かしく思い出されます。退任される際も同じメンバーで慰労会を行いました。

大野宮司時代の権宮司が湯澤貞先生（八代目）、権宮司の三井勝生さんとは小生が神社本庁に出入りしていた時代の渉外課係長、葦津珍彦先生のご子息・泰國さん（後の神社新報社社長）共々親しくご厚誼願つてきました。

私は神職ではありませんが、こうした神社関係者との密接な人間関係もあり、靖国神社とは深くかかわつてきましたつもりです。そんな経緯もあり、亀井静香代議士たちが創建一五〇年を期して南洲翁や白虎隊、まして新選組まで合祀せよという数を頼んだ政治的圧力を加えることを

弘元首相・村山富市元首相ら政界関係者のほか、稻盛和夫京セラ名誉会長ら財界人も賛同者になっている。

申し入れ書では「賊軍と称された

方々も、近代日本のために志をもつて行動した」とした上で、「過去の内戦においてお亡くなりになつた全ての御靈を合祀願う」としている。

亀井氏は申し入れ後、記者団に

「（合祀は）世界の中で日本が平和を発信していく基本になる」と語った。靖国神社側は「ただちにそういたしますとは言えない」と述べたという。

#### 靖国神社との個人的関り

これぐらい亀井氏側の言い分を紹介すれば、アンフェアの誹りは免れるだろう。あるジャーナリストに亀井氏とのやりとりを伝え、適任ではないが私と亀井の紙上対決を持ち掛けた。無名の私では面白み、バランスを欠くのか、実現には至らなかつた。靖国問題に造詣の深い彼に送つたのが以下のようないメールであ

た。小生は俊康先生の子息・康孝君の二年年長、彼が皇学館大学時代から深く交わり、長く共に神宮境内・五十鈴川でみそぎを実修してきた、文字通り兄弟の間柄でした。ご尊父・俊康先生にも親しくご指導頂いてきました。康孝君は本年五月に六十五歳の生涯を終えました。

大野先生が七代目宮司に着任され

松平宮司が後継指名したのが大野俊康先生。大野宮司は熊本天草・本渡諫訪神社宮司で熊本県神社庁長を務められたものの、中央ではあまり知られていない方でした。小生は俊康先生の子息・康孝君の二年年長、彼が皇学館大学時代から深く交わり、長く共に神宮境内・五十鈴川でみそぎを実修してきた、文字通り兄弟の間柄でした。ご尊父・俊康先生にも親しくご指導頂いてきました。康孝君は本年五月に六十五歳の生涯を終えました。

大野先生が七代目宮司に着任され

た際には、大野ご夫妻を招き小生の見逃すことはできません。

小生の動きをキャッチしたのか、先日（五日）亀井事務所に出入りしている友人から電話があり、亀井代議士と代わり激しくやり取りしました。電話では要領を得ないので翌日訪ねることを約束、夕方五時からちょうど一時間、面会し激しく互いの持論をぶつけあつきました。

亀井代議士は学生時代に葦津珍彦先生の指導を受けていたこと、鎌倉の葦津宅で中村とも会つたことがありました。小生もそのことは葦津、中村両先生からお聞きしていました。

亀井代議士たちが提唱する合祀問題が不可なのか、次のように論点を整理してみました。（以下略）

#### 靖國神社「合祀問題」論点整理

#### 靖國神社御創建主旨——「聖旨」

明治天皇御製

歴史学者、秦郁彦氏は『靖國神社

る。

『靖国戦後秘史 A級戦犯を合祀した男』（毎日新聞社）に詳述され

ているように、六代目松平永芳宮司選出は石田和外先生（元最高裁判官）が深く関与されました。石田先生を「英靈にこたえる会」会長にお願いしたのは小生の師父・中村武彦でした。

松平宮司が後継指名したのが大野

俊康先生。大野宮司は熊本天草・本渡諫訪神社宮司で熊本県神社庁長を務められたものの、中央ではあまり

知られていない方でした。小生は俊康先生の子息・康孝君の二年年長、彼が皇学館大学時代から深く交わり、長く共に神宮境内・五十鈴川でみそぎを実修してきた、文字通り兄弟の間柄でした。ご尊父・俊康先生にも親しくご指導頂いてきました。康孝君は本年五月に六十五歳の生涯を終えました。

大野先生が七代目宮司に着任され

た。世とともに語り伝へよ國のため命をすてし人のいさをを

我國の為をつくせる人々のむさしの野にとむる玉かき

明治二年六月二十九日 明治天皇の思し召しにより東京招魂社として創建

明治十二年 別格官幣大社靖國神社となる。

創建時の御祭神 戊辰の役（明治元年から二年、鳥羽伏見の戦・箱館五稜郭の戦）における官軍側戦死者、殉國の英靈をはじめとして、幕末・維新前後の国事殉難者をお祀りする。

亀井代議士や『月刊日本』はしきりに、「靖國神社は長州神社」と言つてはばかりない。参道・外苑に屹立する大村益次郎の銅像が、それを象徴するといふ。

の祭神たち』(新潮選書 17頁)で  
次のように述べている。

「靖国神社の祭神は数的に大部分を占める対外戦争の戦没者と、維新前後の国事殉難者というカテゴリーを異にした二系列がある。前者の選定は単純で規則さえ作れば事務的処理ですんだが、後者は死後の事情が多岐にわたり、流動する政治情勢からの配慮も作用したために、すつきりした

合祀の性格や条件の基準作りは容易でなかつた」

合祀基準に歴史的な変遷があるのも事実。本格的な基準が制定されるのは、昭和十年代になつてからであるという。

別格官幣大社靖國神社になり、國家管理の神社、陸軍が所管する神社となり、陸軍健軍の経緯から長州の影響力が大きかつただろう。戦没の事情が多岐にわたる際に、同郷の死没者を優先的、好意的に合祀したいとの思いは強いだろうが、すべてが恣意的に運用できたわけではない。

あくまで明治天皇の「聖旨」に基づき創建され、歴代天皇の祭祀の継承を予定したところが靖國神社の最大の特色で、戦後、一宗教法人になつた後も「社憲」として、その基本にいささかも変化はない。

七代目大野俊康『宮司通達』で、以下のように職員に職務遂行を求めた。

『靖國神社社憲』の全文に、

「本神社は、明治天皇の思召に基き、嘉永六年以降、国事に殉ぜられた人々を奉斎し、永くその祭祀を斎行して、そのみたまを奉慰し、その御名を万代に顕彰するため、明治二年六月二十九日、創立せられた神社である」とあり、次に、『宗教法人靖國神社規則』の第一章総則の第三条には、「本法人は、明治天皇の宣らせ給うた『安國』の聖旨に基き、国事に殉ぜられた人々を奉斎し、神道の祭祀を行い、その神徳をひろめ、本神社を信奉する祭神の遺族その他の崇敬者を教育

成し、社会の福祉に寄与し、その他本神社の目的を達成するための業務及び事業を行ふことを目的とする」とある。

我々奉職者一同は、この『靖國神社憲』及び『宗教法人靖國神社規則』に則り、職務を遂行せねばならぬことは、言うまでもない――。

「天皇陛下からお預かりしている神社」である。祭神合祀者も上奏し、宮司選定も陛下のご意向を伺いながら(忖度)、靖國神社を守つてきたのが、歴代宮司をはじめ、靖國奉職者の心構えだつた。「長州神社」と侮り、「敵も味方も祀るのが日本文化」と単純化するのははなはだ無責任でもある。英靈顯彰、遺徳奉贊護持にどれ程の苦労があるのか、思い至っていない。

### 俗耳に入りやすい合祀論

亀井代議士と会つた翌日、年少の友人と立川の昭和記念公園を散策し

た。亀井氏とのやりとりが話題になる。翌日、彼から次のようなメールをもらつた。

なんとか、西郷隆盛や白虎隊で若くしてなくなつた人たちを靖國神社に祀つてあげられる理論というのはないものでしょうか? 彼らも祀られるようになれば、中国韓国が首相の靖國参拝に言いがかりをつけづらくなります。もうすぐ、戦友を見舞う人たちは高齢なので皆さん「くなられます。

私の祖父は戦争に行きましたが、今の大学生ぐらいになると戦争に行つた人を見たこともないという人も多いのではないかと思います。このままでは靖國神社と国民とのつながりがどんどん薄くなつてしまいます。軍事オタクと右翼が行くちよつと変わつた神社で、普通の人は行かない場所となりかねません。

数十年後、私が年寄りになつて靖國神社を参拝したら、「犬塚さんから、いろいろと教えていただきなあ。懐

かしいなあ」と手を合わせてると思います。他にも、一緒に拉致問題や台湾問題に関わつた人たちが頭をよぎると思います。

実際にお祀りされているかは別として、私自身は国を想つて人生を全うした人の魂はきっとここに集つているはずだと思ってお参りするだらうと思ひます。――

彼は靖國神社奉贊護持にも熱心で、学習院大学で学んだせいか、皇位繼承問題にも関心が深い。地方議員として福祉や医療問題にも熱心である。こうした好青年が「敵も味方も祀る」といつた亀井論に驚かくだ。俗耳に入り易い。

「賊軍」? 誰を祀るのか?  
亀井代議士と論議した際に、西郷南洲を祀れば、西南の役で西郷とともにに戦つて死んだ西郷軍はどうするのか、玄洋社の源流・筑前一党なども呼応して戦場で倒れ、刑場に消え

た方もある。白虎隊も祀れといふ問題について熱心だつたと思えな、い、暴論である。

去る七月三十日、私が責任者になつてゐる民族革新会議のメンバー約二十名で靖國神社を昇殿参拝、その後に靖国会館に会場を移し、坂明夫権宮司、楠林豪管理課長たちと意見交換会を行つた。坂権宮司の講話を伺つた後で、私が代表して次のような質問をした。

犬塚 本日は實に懇篤なご指導を賜り有難うございます。最近、徳川宮司のインタビュー記事が共同通信社

から配信され、週刊誌などでも紹介されています。この影響もあるのかもしれませんが、「靖国神社は長州の神社、官軍神社である」、西郷南洲や白虎隊、新選組まで合祀すべきだと論陣を張る政治家がいます。徳川宮司の発言を勝手に解釈した論だと思うが、こうした意見についての靖国神社の見解を伺いたい。

徳川宮司はインタビューの中で、「英靈は一柱がそれぞれご祭神ではあるが、大きな一つの塊としての靖國の大神である」とお話しされています。私は母の弟・叔父がガダルナルで戦病死し祀られている。昭和十七年、享年二十三歳、親戚でも叔父が靖国に祀られていることを強く意識しているのは私ぐらいになつてしまつた、勿論会つたことはない。靖国の社頭に立つ時、叔父の出征時の遺影を思い浮かべ、叔父と同じよう世間的には全く無名の、先の大戦に散華された数多の英靈が祀られていることを思い起し、参拝していることを思いました。(権宮司答弁終わり)

死場所、年月日等が漏らさずに神様、英靈として靈璽簿に記されます。お一人おひとりが個性をもたれた神様ですけれども、その全体を靖國の大神様としてお祀りしています。

「敵も味方もみんな祀ればいいんだ」という俗耳に入り易い意見が如何に暴論か――。

社報『やすくに』二十八年十月号で、芦屋大学教授の文章『靖らかな國の神』に大いに教えられた。

「タマは靈魂の意だが、シヒは機関が機能麻痺の状態をいう。鎮まるべき器（肉体）を失つたタマシヒ（遊離魂）を呼び戻し、収まる座を用意する必要がある。個々のタマを命（ミコト）と讀え神として祭つた。靈魂が新たに神に変容する例は奈良時代に見られる。魂が称えられ魂命になり更に國の守護神となるのだが、現代の靖国神社でも同様のこと

なる中で、「大東亜戦争に殉じた護國の英靈は、大きな一塊の靖國の大神になつていく」という靖国のお教学にもかかわる点を詳しくご説明下さい。

**坂明夫権宮司 戊辰戦争における幕府軍の戦没者を祀れという議論があることを承知しています。この気持ちは、理解できます。**

会津の少年隊、女性隊、西郷一党に対して目頭が熱くなる思いがいたします。また、個人的なことでございますが、尊敬する人物として常々、西郷隆盛さんを挙げて参りました。

しかし、靖國神社としての結論から申し上げますと、これらの方々をお祀りしますと國体が成り立たないということです。

明治維新でござりますが、徳川慶喜公は天皇陛下から征夷大將軍に任せられておりました。天皇の委任のもとの統治であつたわけですが、慶應三年十月の幕府側の方々、西南の役における西郷一党の行動を決して否定するものではありませんが、靖國神社への合祀とは別の話でございます。

また、御祭神に対する考え方ですが、これは徳川宮司がということではなくて、靖國神社本来の教學として、二百四十六万六千のひと柱ひと柱それぞれに、お名前、ご出身、戦

が行われているらしい。生前の詳細が判明した相殿神（あいどのかみ・靈魂）を「〇〇ノ命」として靈璽に奉安し、新たに靖國神としてお祀りする毎年十月十七日の靈璽奉安祭である。

「大東亜戦争の戦没者二二三万人の詳細判明と整理（靈璽簿に記帳）は氣の遠くなるほどの時間と労力が必要で、嘗つては、その手書き墨書きに皇族方も奉仕されていたと聞く。國から業務を引き継いだ靖國神社は現在もそれを継続している」――。

府軍も合祀するとする。招魂、靈璽簿作成は必須、不可欠である。靈璽簿が作成できなければ靖國神社のご祭神として合祀することはできない。調査は簡単ではない。お一人おひとりを調べ上げる。出生地、生年月日、死没地、死没状況、享年、膨大な数と長い歳月が経過している。

誰が作業に当たるのか、その費用は

……と考えると、「幕府軍合祀、敵味方も」論が単なる思い付きで、具体的な実務を考慮していない暴論に思えてくる。誰でもいいから祀つとけといふのは、「慰靈碑」か「供養塔」と一緒にしていなか。名前の分からぬ、文字通り「無名戦没者」でもいいのか。神を信じていな無神論者、靖國否定の変容ではないか。

「敵も味方も」論者は、靖國創建の経緯を無視し、「護國精神」の発露になる「靖國」＝「安國」の理念を希薄化し、無害化しようとする底意がチラホラ垣間見える。

龜井代議士たちが言うように、幕府軍も合祀するとする。招魂、靈璽簿作成は必須、不可欠である。靈璽簿が作成できなければ靖國神社のご祭神として合祀することはできない。調査は簡単ではない。お一人おひとりを調べ上げる。出生地、生年月日、死没地、死没状況、享年、膨大な数と長い歳月が経過している。

誰が作業に当たるのか、その費用は

十四日に大政奉還がなされ、そして12月9日に王政復古の大号令がなされます。ここで、慶喜公はその任を解かれるわけです。徳川幕府が終わりを告げました。この時点で、幕府軍に兵權はなくなつたわけでござります。

わが國体は承認必謹、兵權は天皇にあるとなりましてから、旧幕府軍は賊となつてしまふわけです。

個別にその武勲を否定するものでは決してございません。ですけれども、その勲しと靖國神社に祀られるべき天皇陛下への忠とは違うお話です。ですから、幕末、明治維新の時の幕府側の方々、西南の役における西郷一党の行動を決して否定するものではありませんが、靖國神社への合祀とは別の話でございます。

また、御祭神に対する考え方ですが、これは徳川宮司がということではなくて、靖國神社本来の教學として、二百四十六万六千のひと柱ひと柱それぞれに、お名前、ご出身、戦